

第1回 「奴国の謎を探る」

①奴国とは

「奴国（なこく、なのくに）とは、1世紀 - 3世紀前半にかけて、「後漢書東夷伝」や「魏志倭人伝」にあらわれる国で、現在の博多付近に存在したと推定されている。

日本（倭国）が中国（後漢）と外交交渉をもったのは、以下の史料が示すように倭奴国王が後漢の光武帝に朝貢したのが始まりである。その後になって、邪馬台国が魏王朝に使者を派遣している。



金印の印面

『後漢書』東夷伝によれば、建武中元二年（57年）後漢の光武帝に倭奴国が使して、光武帝により、倭奴国が冊封され金印を授与されたという。江戸時代に農民が志賀島から金印を発見し、倭奴国が実在したことが証明された。その金印には「漢委奴国王」と刻まれていた。（刻まれている字は、委であり倭ではないが、委は倭の人偏を省略したもので、この場合は委=倭である。このように偏や旁を省略することを減筆という。）

原文「建武中元二年 倭奴國奉貢朝賀 使人自稱大夫 倭國之極南界也 光武賜以印綬」（『後漢書』東夷伝）

建武中元二年、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と稱す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす。

一方、時代がやや下って魏志倭人伝には、3世紀前半の奴国の様子が記録されている。

原文 東南至奴国百里。官曰兜馬觚、副曰卑奴母離。有二萬餘戸。

東南の奴国まで百里ある。そこの長官を兜馬觚（じまこ、じばこ）といい、副官は卑奴母離（ひなもり）という。二万余の家がある。おそらく大和時代の難県（なのあがた）、福岡市の前身であったと考えられている」（Wikipediaから）

②文献に現れる奴国（邪馬台国の会HPから）《http://yamatai.csides.com/katudou/kiroku196.htm》

奴国は、倭の地域では、文献に現れる最古の国として後漢書に登場する。

後漢書	4:6:2年に范曄があらわした。三国史（2:8:5年成立）より後にできた。
倭伝	建武中元二年（西暦57年）、倭の奴国、貢（みつぎ）をささげて朝賀す。使人は、みずから大夫（たいふ）と称す。（倭の奴国は）倭国の極南界なり。光武（帝）は、賜うに印綬をもってす。 安帝の永初元年（西暦107）倭国王の帥升等、生口160を献じ、願いて見（まみ）えんことを請う。 桓（帝）・靈（帝）の間（146～189年）、倭国大いに乱れ、更々（こもごも）相攻伐し、年を歴るも、主無し。一女子あり。名を卑弥呼という。年長ずるも嫁せず。鬼神の道に事（つか）えて、能く妖を以って、衆を惑わす。是に於いて（倭国の人々は、卑弥呼を、）共に立てて王と為す。
光武帝紀	（建武中元）2年春の正月 辛未（干支による日の記載で、8日とみられる）、東夷の倭の奴国王、使を遣わして奉獻す。2月 戊戌（5日とみられる）、（光武）帝崩ず。年62（歳）
翰苑	6:6:0年に張楚金が編纂した類書（百科事典）。古文献を多く引用。
倭国伝	中元のさい、紫綬の榮。

後漢書、翰苑の記述のまとめ

- ・西暦57年、倭の奴国が漢に朝貢し、光武帝は奴国に印綬を与えた。
- ・西暦146～189年の間に、倭国に大乱が続いた。
- ・卑弥呼が王に共立され、倭国がおさまった。
- ・光武帝から賜った印綬は、紫の組ひもの帯がついていた。『東觀漢記』によれば、紫綬のつくのは金印なので、光武帝から金印を賜ったことがわかる。

・王朝の順序と史書成立の順序

後漢書は、三国史よりあとに成立したので、三国史の記述を参考にしてかかれた部分がある。（邪馬台国の会HPから）

王朝	史書
漢 (BC202～AC8)	漢書
↓	↓
新 (AC8～AC23)	三国史 (AC285)
↓	↓
後漢 (AC23～AC220)	後漢書 (AC426)
↓	
三国時代 (AC220～AC280)	

奴国は倭の極南界なり

後漢書では、北九州の奴国が、倭のもっとも南の地であると記述する。

・魏志倭人伝は、朝鮮半島南端の狗邪韓国が、倭の北岸であると記述する。

これらのことから、倭のテリトリーは、おおそ対馬をはさんだ日韓の両岸の地域であったと推定される。そして、ここは、稲作の渡来ルートとしても想定され、また、日本語のもとになった言葉が発生した地域とも考えられる。

（邪馬台国の会HPから）



③ 奴国の中心はどこか

◆安本氏が安徳台が

奴国の都とする理由

安本美典氏は「奴国の滅亡」（1990年10月刊）という著書で、「考古学的遺跡の豊富さから、奴国の中心地、都を春日市の須玖岡本あたりにあて、不弥国の中心地を飯塚市の立岩をあてる見解が多いが、違うのではないか、那珂川町の安徳台が奴国の中心だったのではないか」とし、その理由として次の3つを挙げている。

	倭人伝に記される里数	り弥川重は小離町須	コ内不須	あたりの長さ
帯方郡→狗邪韓国（金海）	7000里	7000里	7000里	7000里
狗邪韓国→对馬国（厳原）	1000里	1000里	1000里	1000里
对馬国→老岐国（勝本）	1000里	1000里	1000里	1000里
老岐国→末廬国（唐津）	1000里	1000里	1000里	1000里
末廬国→伊都国（平原）	500里	500里	500里	500里
伊都国→奴国	100里	100里	100里	100里
奴国→不弥国	100里	100里	100里	100里

魏の時代の1里は400m強だが、実際は100m以下にしかならない。これは韓諸国や倭国では周の短里がそのまま使われていたと考えられる。

①魏志倭人伝の邪馬台国のルートを表にして見てみると、これまでの案だと伊都国→奴国、奴国→不弥国が200mを超えるのに対し、やや改善する②那珂川町のある筑紫郡は、「那珂郡」「御笠郡」「蓆田郡」が合併してできた。那珂川町は那珂郡に属していた③古代においては都は河川の中流域に営まれることが多く、しかも安徳台は独立丘陵で、のちに安徳天皇が内裏を設けるなど要害の地である一とする。（「奴国の滅亡9章」から要約）

また、安本美典氏が参照にしたという藤島正之行氏の著書「遙かなる奴国」にそのことが詳しく書かれている。

◆藤島正之氏の見解

そのなかで伊都国から奴国へのルートについて藤島氏は以下のように述べている。

「東南奴国に至るには百里」は、高祖山（たかす）付近の地から東南と言え、奴国の都の在る処と想定される。今日の那珂川町山田と安徳の間に在る標高60mの台地をさしているものであろう。この地以外には考えられない。高祖山の山麓から東南への出口は日向（ひなた）峠である。日向峠は昔は車も通らない山道の峠であったが今日では拓福され前



（注＝伊都国の都のあった高祖山周辺と安徳台を経て、不弥国の都があったとされる宇美町の上の原（大字宇美神武原）のルートが下側のV字線（一部クロス）。上のゆるいV字線は伊都（高祖山周辺）から須玖岡本遺跡（春日市）を経て飯塚市の立岩のルート。Google地図）

原町から福岡市早良区への重要な通路となっている。日向峠を越え、早良区の金武・内野・脇山・小笠木（おかさぎ）峠を過ぎると、那珂川町の西畑・別所・山田・安徳台という道順になる。伊都国の高祖山は北緯33度線上に在る処である。春日市須玖岡本の地は凡そ北緯32度線上に在る。那珂川町安徳台は北緯30度線の更に南に在る地である。

従って高祖山から須玖の岡本の台地は東南と方位を示すことば無理である。方位は東であるとしなければならない。3.5里（14km＝高祖山麓→須玖岡本）の距離は凡そ4.5里（18km＝高祖山麓→安徳台）程度に修正しなければならない。伊都一奴を4.5里とすると次に奴一不弥の間が2.5里（10km）ということにもなる。従って三世の頃の奴国の都は、地理誌としての倭人伝を読む限り那珂川中流の安徳台に在ったとするのが正しいと筆者は思うのである。（かつこ内は石合が注を追加）

「東行不弥国に至るには百里」の東行の起点はやはり安徳台の地である。到着する処は糟屋郡宇美町の山の手の上の原一帯の台地であろう。この付近に古代の不弥国の都が在ったのではないか。

宇美・須恵の地は、宝満山・三郡山・砥石山・若杉山・大城山・乙金丘陵にかこまれた盆地である。この盆地が古代の一小国である、不弥国の本処地であろう。不弥国の領域は更に志免・篠栗・糟屋・久山・香椎などの当時の村々を含めた、所謂表糟屋の地であろうと私は想定する。時代をくだるにつけてこの国の中心は海辺の香椎に移って行くものと思われるのである。」（藤島正行氏の著書「遙かなる奴国」から）

④注目の発掘の続く安徳台

◆堅穴住居跡100基出土 奴国拠点集落か 福岡・那珂川（2001年3月6日、山陽新聞夕刊）

福岡県那珂川町教育委員会は、同町の安徳台遺跡群で、弥生時代中期（紀元前1～紀元1世紀）の堅穴住居跡約百基を五日までに確認した。

遺跡群は、中国の史書「魏志倭人伝」に記載のある弥生時代のクニ、奴国（なこく）の王墓とされる須玖岡本（すぐおかもと）遺跡＝同県春日市＝の南西約6キロの台地上に広がっている。町教委は「奴国を構成する拠点集落と考えられる」としている。

町教委によると、遺跡群は総面積約十万平方米で、これまでに約一万四千平方メートルを発掘。稲の穂をつみ取る道具の石包丁や、石剣が見つかった。

◆弥生最大級の円形住居 福岡・那珂川遺跡群で出土 奴国の工房跡か（2002年3月13日、同）

福岡県那珂川町の安徳台遺跡群で、弥生時代最大級となる弥生中期中ごろ（紀元前後ごろ）の円形堅穴住居跡が見つ

かり、同町教育委員会が十二日、発表した。石器の破片や青銅器の鋳型が住居内で出土しており、弥生のクニの拠点的な集落の工房とみられる。

九州大の西谷正教授（考古学）は、当時九州北部に強大な勢力を持っていたとされる奴国（なこく）の重要な集落と推定。「弥生時代でも最大級の堅穴住居だろう。共同作業場だったのではないかとしている。

円形住居はだ円形で直径が12.8～14メートル。直径1メートル以上の大きな柱穴を中心に、環状に十六本の柱が巡っていた。

住居内で、穂摘み用の石製品の未成品や、銅剣や鉞（やりがんな）作っただろう鋳型のほか、鉄の素材、勾玉（まがたま）などが出土。炉跡や焼け土も見つかり、鉄製品を作っていた可能性もある。

同遺跡群ではこれまでに、弥生中期の堅穴住居跡が百基以上出土。



【写真説明】福岡県那珂川町の安徳台遺跡群で出土した弥生時代中期の直径12.8～14メートルの円形堅穴住居跡

直径九メートル以上の大型住居四軒が併存する大規模集落だったとも考えられるという。

弥生後期では、横浜市の森戸原遺跡で直径14～18メートルの円形住居跡、滋賀県守山市の伊勢遺跡で一辺14メートル弱の方形住居跡が出土している。

◆奴国は同族支配？ 福岡で出土 人骨DNA分析（2006年2月1日、山陽新聞朝刊）

中国の史書「魏志倭人伝」に登場する弥生時代の奴国（なこく）の拠点集落とされる福岡県那珂川町の安徳台遺跡群から出土した人骨をDNA分析した結果、首長集団の一部に血縁関係があったことが三十一日分かった。

同町教育委員会は「集落が血のつながった一族によって支配されていた可能性が高まった」としている。弥生時代の有力な首長墓のDNA分析は国内で初めて。国立科学博物館人類第一研究室の篠田謙一室長（分子人類学）が行った。

九州大の中橋孝博教授（自然人類学）による人骨の形態学的調査（性別判定など）と合わせ、被葬者集団の実像解明が期待されていた。

安徳台遺跡群は、奴国の王墓がある須玖岡本遺跡（同県春日市）に近く、王墓とほぼ同時期（紀元前1世紀ごろ）に埋葬された甕棺（かめかん）10基が2003年に出土。人骨5体が残っており、中橋教授の調査で性別は男性4人、女性1人



【写真説明】DNA分析された、福岡県那珂川町の
安徳台遺跡群から出土した人骨

とほぼ判明した。

篠田室長による五人の歯や人骨のDNA分析では、母方だけ遺伝するミトコンドリアDNAの塩基配列が4タイプ存在。うち3号人骨（男の可能性大）と5号人骨（女）のミトコンドリアDNAの配列が一致し、親子やきょうだいなどの母系の血縁関係があると分かった。

集落の首長とみられているのは、43個の貝輪などが副葬されていた2号人骨（男）。5号人骨はその配偶者とも推定される。同教委は「今回のDNA分析や、近くでも貝輪を着けた幼児の骨が見つかったことを考え合わせると、親の地位を継承する社会構造があり、首長も同族による世襲制だったとも推定できる」としている。

<まとめ>

◆100基以上の住居群や弥生時代最大級の直径14mの建物跡も発見され、これまで「須玖岡本遺跡」（奴国の丘）が奴国の都とされていたが、今後とも発掘が進めば、安徳台が奴国の都とされるようになると私は確信している。

◆甕棺墓人骨からDNAを分析した結果は→①首長集団の一部に血縁関係②ミトコンドリアDNAの塩基配列が4タイプ存在。うち3号人骨（男の可能性大）と5号人骨（女）のミトコンドリアDNAの配列が一致し、親子やきょうだいなどの母系の血縁関係がある③貝輪を着けた幼児の骨が見つかった＝世襲制の確立

⑤奴国と銅矛（おもに中広形・広形銅矛）

安本美典氏の「奴国の滅亡」は、18年前に書かれたもので、出雲での加茂岩倉遺跡の発見以前だが、基本的にはは現在も通用するものである。

◆銅矛の年代に対する見解
青銅器の武器の区分と年代

＝杉原荘介氏による

細型銅矛……弥生時代中期の前半から後半（西暦前100年から西暦後100年ぐらい）

中細型銅矛……弥生時代後期前半（西暦後100年代）

広型銅矛……弥生時代後半（西暦後200年代）

これに中広形を加え4つに別ける考えもある。年代観は学者によってことなる。

銅矛の年代設定のうち、細形・中細形の銅剣・銅矛・銅戈はしばしば、甕棺から出土している。これに対して、中広形や広形銅矛は、土器などを伴わず単独で出ることが多く、年代設定が難しい。

◆武器形青銅器の分布

武器形青銅器の分布のうち、細型・中細形（上右図＝地図1）をみると、細形と中細形が唐津方面と現在の福岡平野に中心があ

III 矛・戈・剣の変遷

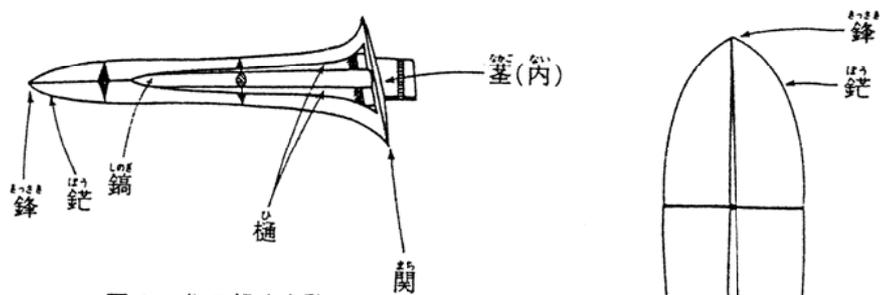


図4 戈の部分名称

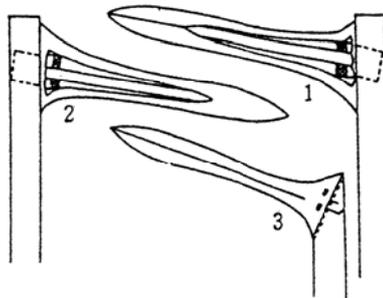


図5 戈の柄への装着

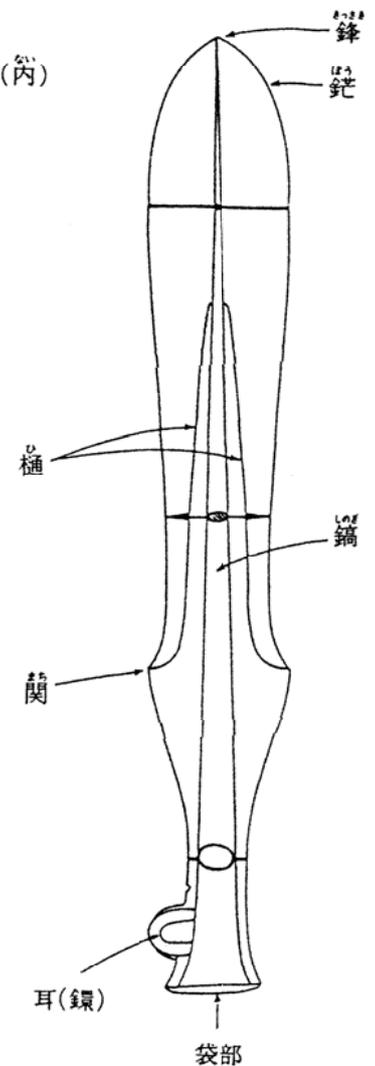
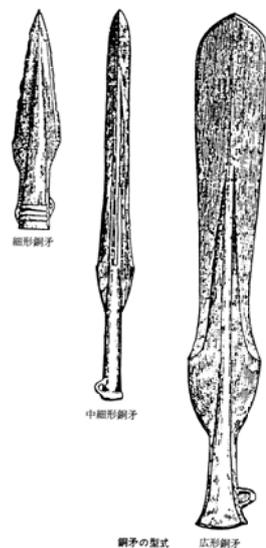


図3 矛の部分名称



矛とは柄を金属部分に差し込むものをいうとされ、槍と区別されるが、古代においては厳密の区別はなかったようだ

のように見える。それが次の時代に造られたと思われる中広形の分布図（上左図＝地図2）では、両地区からの青銅製武器の出土がなくなる。同時に中広形の青銅製武器の分布は沿岸部から内陸部へ、また行橋平野や中津平野など東へ移っている。

そして、さらに広形銅矛・銅戈の分布図（右図＝地図3）を見ると、特殊な分布状態を示す。すなわち対馬から最も多く出土する。このほか福岡県内や国東半島、四国西部にも広がっている。

◆広形銅矛の出土状態が異なる対馬と九州本島

このことについて安本氏は、金印を志賀島に埋めた奴国の王族は、あるいは、対馬方面へのがれたのかもしれないとし、その根拠を次のようにあげている。

①対馬では19カ所の神社に数本から十数本の広形銅矛が収集されているのに対し、九州本島では、広形銅矛が人目に付かない谷間の斜面や山腹などから出土する（下右図＝図5参照）。

②九州本土の旧奴国の領域とみられる地域からは、広形銅矛の鋳型（石製鋳范）が、多数出土しているのに、対馬からは、鋳型が、出土していない。おそらく、対馬でつくられたものは比較的わずかで、大部分は、奴国滅亡の前後に、はこびこまれたものである。

③九州本島では、広形銅矛が、墓から出土している例がないのに、対馬では、箱式石棺から出土している。対馬では、広形銅矛が忌避されず、生活のなかで生きていて、墓のなかにも埋められたようにみえる。

④九州本土では、広形銅矛は、2世紀ごろにはほぼ滅びたとみられる。しかし、対馬では、箱式石棺から邪馬台国時代の遺物と共伴出土している。

⑤対馬から大量の広形銅矛が出土するため、広形銅矛は、航海の安全を祈るための祭祀具であろうとする見解がある。しかし、もしそうであれば、対馬よりも人口が多かったとみられる壱岐からも、大量の広形銅矛が出土してよさそうである。が、壱岐からこれまでのところ、広形銅矛は出土していない。これは70本以上の広形の銅矛が存在している対馬と大きな差がある。

◆広形銅剣の分布は何か

中細形青銅器は、銅剣、銅矛、銅戈をひとまとまりに分布図を描いても、個別に書いても大きな変化が現れないのに、広形銅矛と広形銅剣の分布は、きわめて異なる。この問題はまったくの謎といってよい。四国北部に広形銅剣を祭具とする別の祭祀集団があったことは確かだ。现阶段では神話と結びつくようなものもない。安本氏も論じていない。

また、この青銅器の考古学的出土状況は、銅鐸の畿内中心部からの消滅と、周辺部への拡散、そして全面的な消滅とそっくりである。

◆神話で広形銅矛はどう語られているか

神話では「大国主命が高天原からの使いに対して、『国平（くにむ）けし時に杖（つ）けりし広矛』をたてまつり、『吾（われ）比の矛を以って、卒（つひ）に功治（ことな）せることある』とのべ国譲りをしている。」（『日本書紀』神代下の9段）と語られている。これが即、広形銅矛と断定できないにしても、考古学と神話の接点としてもっと注目されるべきだろう。これは大国主が宗主権を持ち、呪術的な意味を銅矛に持たせていたといえそうだ。

<まとめ>

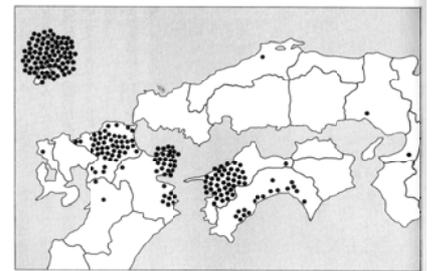
これらの状況から考えると、奴国では中広形銅矛を祭具として使っていたが、さらに幅広い銅矛を使い始める時期が来る。ちょうどそのころなにかの事件があり、その広形銅矛を持った人たちが、逃れて行ったと考えられる。「沼矛」（古事記、日本書紀は瓊＝ともに音はぬぼこ）と表現され、美しい珠の付いた矛とされている。国を形



細形・中細形の銅剣・銅矛・銅戈の分布（地図1）

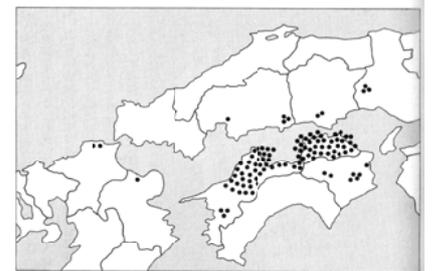


中広形の銅剣・銅矛・銅戈の分布（地図2）



地図8 広形銅矛・銅戈の分布

広形の銅矛・銅戈の分布（地図3）



地図7 広形（平形）銅剣の出土地点の分布

広形の銅剣の分布（地図4）



対馬での広形銅矛の分布（地図5）

成する最初の島である「オノコロジマ」の誕生について、「天の浮橋から沼矛をさしおろし、海水をかきませた矛の先から滴り落ちた雫が自ずから固まったものである」と書かれている。この矛が弥生時代中期中ごろ（1世紀前後）から北部九州に登場し、次第に幅広化していく銅矛を反映したものととらえることは、大きな見当違いではなからう。

そうであるなら、後漢王朝から金印を贈られた奴国でのできごとが、イザナギ・イザナミ神話に反映したものと考えてもいいのではなからうか？

この反映したものと見解に基づく説をおおむねの意見として、「日本最初のくに 遙かなる奴国—古代那珂川の流域に在った倭の奴国—」の中で藤島正之氏は次のように述べている。

「二神の名は那岐であり那美である。萬里の波即ちなぎ・なみを乗り換えて、ついた処が玄界灘の地であろう。その地に天の浮橋・おのころ島があるというのである。即ち天の浮橋とは現在の福岡市東区の和白方面から博多湾に突き出している、海の中道のことであろう。その志賀の島につづいている。古代に於いてはその名のように志賀の島であったであろう。志賀の島の西の島が能古の島（残島）である」と述べ、国産み神話の舞台を奴国のエリアでのできごととしている。

あまりにも神話的で歴的事実の反映とまで考える必要はないかもしれないが、もともとは朝鮮半島や大陸で作られた細形の銅矛が北部九州に持ち込まれた後、国内で独自の銅矛が作られ出す。日本神話に登場するからにはその関係を見捨てることはできないと思う。そうであるなら、日本神話の沼矛は、奴国で使われた中広形・広形銅矛に代表とする銅矛を指すとしてよいと思う。

⑥金印の謎（倭国大乱は奴国と邪馬台国の争い）

◆金印偽造説

千葉大学教授で、口語訳古事記の著者の三浦佑之氏が、「金印偽造事件—『漢委奴國王』のまぼろし—」（2006年11月刊）を著し、志賀島で出土した金印は「亀井南冥が儒者として2つあった自分の藩校の地位を上げるために捏造した」というのが主張のようだ。ミステリー風に謎を解明していくそうだが、三浦氏のホームページでは「帯には、『あの国宝はでっち上げだった！』と書かれている。そして、それにもまして、刺激的な内容になっています。文字通り、金印『漢委奴國王』は、偽造されたもので、後漢の時代に光武帝から下賜されたという『後漢書』の記事をもとに、18世紀末の日本で作られた。ぬるま湯的な古代史研究、考古学研究に覚醒を促す書といえましょうか。」と書いています。これをみると、意識的にセンセーショナルに書いていることは間違いない。

これまで偽造説はたくさんあるが、この本では、偽作者が「倭」を「委」と記すなど芸が細かく、裏の裏をかく知識を持っていたと主張しているようだが、はたして江戸時代に中国での古代の金石文字の略し方（減筆）を果たして知っていたか、と安本氏は反論している。この点は水掛け論で、知っていたかもしれないし、知らなかったも知れない、お互いに仮説同士の言い相で結論はでないと思う。

さらに本物説の中でも「奴」を「ど」と読むべきとして、「イド」で「伊都」国に比定する意見もあるが、漢の時代には「ナ」という説が一般的である。したがって「灘の県」や「那珂川」の「ナ」でいいのではないだろうか。

金印の発見場所が志賀島の水田の溝の付け替え中に見つかり、非常に小さな空間しかなくとても墳墓とは思えない。なぜ、このようなところから出土したのかは大きな謎だといえよう。

この疑問に最初に答えたのは医師で九州の考古学の礎を築いた中山平次郎氏である。

◆中山平次郎氏の見解

「漢委奴国印の出土状態は、はなはだ奇妙であって、この金印がたった一つ志賀島に埋められていたのは、その実物がわが文化史上重要な発見物であるだけに、これを埋めた当時、わが地方の古代文化の上に、なにかさぶる重大なる事件が起ったのではないかと感ずる。

これらの事情を考慮し、私はついに漢委奴国王印をもって、むかしある重大事件に際して、志賀島岬の崎なる思いもよらぬ地点に隠されてあったものと認め、隠匿以来奴国の人々にも、この金印の行くえが、わからなくなり、天明四年偶然の機会に、これが発見され

イザナギ・イザナミの絵画では、広形・中広形の矛を描いている場合が多い。確たる根拠には乏しいが、江戸期以降、画家や古代に関心のある人々の間で直感的にそう受け止めていたのだろう。上の図は最近のイラストだがその伝統を受け継いでいるようだ。



淡路島みどころミュージアムHPから (<http://www.awaji-vision.jp/midokoro/fuudo/f00.html>)

……目を異様に光らせながら、金印を埋め、立ちあがって、よろめくように去って行く男の姿がみえる。海の声と、松に渡る風の音と
夕間に消えて行く奴国王？
が、男をつつんでいる。夕日は、西の海に沈もうとしている。黒いシルエットとなって、男は去って行く。奴国の栄光は、

その日の落日とともに終わりたのである。
男は、王であったかもしれない。男は、静かに消えて行った。日暮れの薄明のなかで。
あとには、茫々千八百年まえの闇がひろがって行く。（「奴国の滅亡」から）

たと思考するにいたった」(中山平次郎著『金印物語』=「奴国の滅亡」から)

「金印が志賀島に埋没されたのは、漢末の倭国大乱と密接な関係をもつのではないかと思う。後漢のとき、勢威が大いにふるったのは、光武帝、孝明帝、孝章帝の三代の治世にすぎない。(略)倭の奴国が、まず漢に通じたことが、奴国をして、政治上の重要な地歩を得させた。

奴国は、一時大勢力を占めるに至ったようである。しかし、奴国が勢力を得るに至ったのは、後漢の後援があったからである。他国が、漢をおそればばかったことは、ほとんど疑いをいれない。奴国を中心とする勢力は、永続しなかったようで、後漢の威信が失墜するとともに、しだいに勢いを失うにいたったのであろう。

桓霊の間の倭国大乱の一方が、邪馬台国であることは、明白であるが、その敵は不明である。しかし、この大乱は、邪馬台国対奴国の戦乱であったとしか思われぬ。

(略)当時倭国は、両派にわかれ、あるいは邪馬台国に属し、あるいは、奴国とむすび、たえず反目するに至ったのではないかと推測される。邪馬台国が、終局の勝利者であったことは、疑いをいれる余地がない。邪馬台国とのあいだに戦端が開かれたさい、邪馬台国は、この金印を獲ようとし、また、奴国は、それを保とうとしたであろう。天が奴国に組せず、邪馬台国の軍兵が、ついに奴国に侵入するに及んで、この宝印が隠蔽されるに至ったことは、あやしむにたりない。金印隠蔽のところとして、志賀島が選定されたのは、敵軍が、筑後方面から侵入したことから考えて、うなずける。(略)金印が、志賀島から発見されたことからみれば、志賀島は、あるいは、奴国王などの終焉の地であるかもしれない」(大正三年『考古学雑誌』=同)

◆和田清氏(東大東洋史教授)の見解

和田清氏(東大東洋史教授)も奴国は邪馬台国に滅ぼされたとの考えを示している。

「墓から出たものならばともかく、道ばたから出たのがあやしいとか、丁重に箱におさめていたのがあやしいとかいう説もありますが、私どもに言わせると、道ばたから出てきたからこそ本物なので、もし陵墓から出ればかえって怪しいと思います。

これは国王の印ですから、宝として代々伝え尤もので、一代ごとに墓に葬ったものとは違います。これは想像ですが、おそらく奴国王家に国王の金印があるということは、当時に知られた事実で、これを欲しがったものがたくさんあったのでありましょう。そこで奴国が衰えたとき、南方から大敵が起って(おそらく後の女王国などでしょう)、これをうち滅ぼしたとき、国王かもしくは印綬を預ったものがこれを懐いて逃れ、ついに道ばたに隠して、その身はそのまま亡びてしまったのでしょう。それだからこそ金印が博多のさきの海の中道の奥の志賀島などから出たのだと思われまふ。」(「東洋史上より観たる古代の日本」ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会刊、一九五六年二月。『季刊邪馬台国』19号、梓書院刊、一九八四年春号に転載がある。=同)

◆安本氏の見解

中山平次郎氏や和田清氏は、このように、金印は、倭国内の戦禍によって、隠されたものであろう、とする。そして、あとの女王国などであろうと考えられる「南方からの大敵」によって、奴国は、うち滅ぼされたのであろう、とする。私も、中山平次郎氏や和田清氏の考えに賛成で、博多湾岸にあった奴国は、新しく筑後川流域に勃興した邪馬台国によって、滅ぼされたと考える。

安本氏は奴国一族、またはその残党が対馬へ逃れ、広形銅矛が伝えられ、墓に納められるなど、対馬での異常とも思える広形銅矛の出土量になっている、としている。

しかし、中山氏は、第二次大戦後の一九五〇年に、『九大医報』第二十卷三号にのせた論文「考古学上より見たる神武東征の実年代」では、「西暦五七年に朝貢した奴国王の金印の出土状態が、大きな石の下に置かれていたことは、何か突発的事件のために隠匿された形跡がある。これは、神武天皇が日向から北上したとき、奴国王は、その金印を、志賀島に埋め、神武東征の軍に合流して大和に移ったのであろう。」というように、意見を変えてしまった。(同)

<まとめ>

◆東遷論をめぐって

戦後になって瀬戸内海沿岸の高地性弥生集落跡が発見され、この山城や烽火台を思わせる遺跡が、倭国大乱の跡とする見解が強く出されたことから、中山氏も影響を受けたのかもしれない。

このため中山平次郎氏やそのあとを継ぎ、「実在した神話」などの著書もあり、平原遺跡の発掘で有名な原田大六氏は、神話との比較する際の年代論で、安本氏と大きく異なってしまった。

《中山氏》倭国大乱を神武東遷に当てはめ、「神武東征の実年代をもって、西暦紀元57年より余り多く後に考えがたい」とする。

《原田氏》東遷の時期を倭国大乱の終わった180年前後とした。

ともに東遷論であるが、邪馬台国の時代には、すでに大和に移っていた、との考えになる。原田氏とともに平原遺跡を発掘した柳田康雄氏は東遷の時期にはふれていないが、3世紀はじめには大和に邪馬台国はあったとする邪馬台国時

代にはすでに大和に移っていたという説をとる。

これに対し、安本氏は、3世紀の238年から248年の卑弥呼の時代は、まだ九州（筑後＝朝倉市方面）に在ったとする点で決定的に異なる。

これが天皇在位一代十年説との大きな違いである。倭国大乱を機に福岡平野からの出土遺物が減っていく現象を、「東遷」とみるか「筑後勢力」の主導権の奪取と見るかの違いである。

◆最近の議論

同じ東遷論でもこのように異なるが、最近では弥生時代を紀元前10～9世紀まで早める説が出され、全体に弥生時代を早め、3世紀はじめには古墳時代に入っており、邪馬台国は畿内にあったとする議論が、一般的だとさえ言える状況にある。

しかし、その議論には誤りがあると考えている。炭素14年代測定法には誤差（一般的に較正值で補正する）があるし、年輪年代測定法にも私は疑問があると考えている。（一般的には、測定値を疑う科学的根拠はないとされるが、地域的な問題があり、例えば1万年前の酸素濃度などに差があるのではないかと考えている。）

日本人が自らの記憶を古事記や日本書記に残しているはずなのに、多くの人が記紀は机上の造作とする津田左右吉氏の呪縛の中にいる。

◆結論

金印は倭国大乱で邪馬台国に敗れた奴国の人が隠したもので、王族の多くが対馬に逃れ、一部は豊前平野、四国西部に逃れたのではなかろうか。奴国の成立と銅矛の発展は、時代的にもよく合致しているように思う。したがって、国生み神話に記憶されていたといえるだろう。その後、筑後で新しく勢力を伸ばしてきた邪馬台国に奴国は滅ぼされる。神話では銅矛を使って国づくりをしたイザナギ・イザナミの子として高天原の女王・天照大御神（卑弥呼）が登場する。今回は天照大御神の誕生の地・阿波岐原を探すことから始めようと思う

<付録>

◆安本美典氏の認識（安本美典著「奴国の滅亡」のプロローグから）

西暦57年、博多湾沿岸国家「奴国」は、後漢王朝から、金印紫綬を与えられる。後漢王朝の権威を背景に、以来、100年以上、「奴国」は、近隣に威をふるう。しかし、「奴国」は、後漢の衰退とともに、威をうしなっていく。

二世紀の後半、中国では、「蒼天すでに死す。黄天まきに立つべし。」のローガンをかかげて、黄巾の賊が兵をあげた（184年）。そのころ、わが国でも、大乱がおこり、博多湾沿海国家「奴国」は、筑後川上流域の山地に勃興した「邪馬台国」によってうち滅ぼされる。『魏志倭人伝』の記す「倭国の大乱」の実態は、「奴国」と「邪馬台国」との争闘とみられる。西暦239年、邪馬台国の女王卑弥呼は、魏王朝から、金印紫綬を与えられ、名実ともに、倭の諸国の盟主的存在となる。（略）

「奴国」から「邪馬台国」へ。この間に、背景となる中国の勢力が、後漢から魏へと、うつり変わったばかりではない。

私は、邪馬台国の時代は、「弥生時代」ではなく、「西新（にしじん）式」（西新式土器）の時代であると考えている。「奴国」から「邪馬台国」へのうつり変わりは、「弥生時代」から「西新式時代」へのうつり変わりに対応する。また、葬制も変化する。「甕棺」の時代から、「箱式石棺」の時代へと移行する。

この本は、このような、私の「新説」をまとめたものである。はじめに、そのおもなポイントを紹介しておこう。ポイントは、おもに、つぎの五つである。

(1) 邪馬台国の時代は、「弥生時代」ではなく、「西新式時代」である。

かつて、「弥生時代」という時代は、存在しなかった。1917年（大正6年）までの時代区分では、最初に石器時代があり、そのあとすぐ、古墳時代が続くと考えられていた。中山平次郎氏や森本六爾氏によって、「弥生時代」が、あらたに設定されることによって、明確な特徴をもつ「弥生時代」がうかびあがってきた。

今日、「邪馬台国時代」を、「弥生時代」に入れる見解と、「古墳時代」に入れる見解とが、対立しているが、「弥生時代」と「古墳時代」とのあいだに、邪馬台国の時代として、「西新式土器」の時代約100年を設定すると、事態は、鮮明となる。「西新式時代」は、ひとつの明確な特徴をもっている。すなわち、つぎの二つを区分する。

(2) 博多湾沿岸国家であった「奴国」は、筑後川流域に勃興した「邪馬台国」によって滅ぼされた。「奴国」は、後漢王朝のバック・アップをうけ、「邪馬台国」は、新興の魏王朝のバック・アップをうけた。弥生時代の後期ごろに、甕棺墓は、激減する。福岡平野および近隣地域では、墓そのものが激減する。

(3) 「西新式文化」の内容は、そのまへの、「甕棺－銅利器」の時代よりも、むしろ、つぎの古墳時代と共通するところが多い。ただ、古墳時代には、中心となる場所が、北九州から、畿内にうつっている。これは、「邪馬台国の東遷」によって説明できる。

(4) 纏向（まきむく）古墳群の年代を、3世紀にくりあげる見解がしばしばみられるが、そのような見解は、土器や鏡による編年と合致していない。纏向古墳群はほぼ4世紀以後のものともみられる。纏向遺跡は、崇神天皇のころの大神（おおみわ）神社信仰や、『古事記』『日本書紀』の伝える四世紀の、垂仁天皇の「纏向の珠城（たまき）の宮」や、景行天皇の「纏向の日代（ひしろ）の宮」とむすびつくところの多い遺跡であろう。

(5) すでに、中山平次郎氏がのべているように、奴国と邪馬台国との争いこそ、『魏志倭人伝』の伝える「倭国の大乱」の実態である。